

寄稿

モンゴルの人達から見た東日本大震災のうら話



安部 正毅（13期）

1 プロローグ

最近の読売新聞の1面に「福島原発第一 2・3号機設備高い線量」という記事が1面に載っている。2011年3月11日は福島を中心に東北地方を大地震とそれに伴う津波が襲い、福島県民が16万4865名被災した。今年はそれから10年を迎える。私自身1995年の阪神・淡路大震災で被災した事もあり、人ごとではない思いがする。丁度10年前の地震の時、私はモンゴルの海外支援プロジェクトの仕事をしていた。10年目を迎え当時を思い出しながら当時のモンゴルを回想してみたい。

私は2009年3月より欧州復興銀行（EBRD：本部 London）のメンバーとしてモンゴルで活動しているEBRDの14のプロジェクトの一つを担当していて、プロジェクトリーダーとして活動していた。よくNPOの活動と間違えられるが、私自身が開発援助国で井戸を掘ったり、木を植えたりする仕事ではなく、私の任務はその国の産業を興すマネージメントの援助である。私はモンゴルの基幹産業であるカシミヤ産業を担当し、カシミヤ、キャメル等を原料とした製品の製造技術の確立、製品開発、品質管理、設備計画、エネルギー管理、環境保全・整備、製品流通部門の整備、マーケティング等の支援を任務としていた。

時期は3月中旬、日本ではどことなく春が感じられる季節。ウランバートル国際空港はモンゴル国で最も大きい空港だがターミナルの規模は神戸空港位であるのに、駐機場には空軍機が見られ軍用にも使用されている。現在今後の発展を期して、日本の開発援助によりウランバートル近郊に第2の空港を建設中である。

迎いの車に乗ろうとしたら通訳氏から「手袋をしてください」と注意された。素手で車の取手に触れると手の皮が取手に張り付き、皮がむけるからと注意された。彼の話では、今朝の気温は-25℃、日中の最高気温は-10℃くらいで暖かいという。それでも危ない、油断をした！手の皮がはがれてはたまらない、言われたとおり手袋をはめる。海外では何でもとりあえず素直に従うのが良い。



ウランバートル市内トラックの防寒

迎える車は VW のランドクルーザータイプで車高が高く見晴らしがよい。道路には全く雪がなく氷も見られない。また雪は粉雪で風に飛ばされてしまうから平地では積もらない。気温が低く雪が一日中溶けないため、この国では冬でもノーマルタイヤのままでよい。

空港からウランバートル市街までメイン道路のはずだが、あちこちに舗装が壊れて穴があり、車はそれを巧みによけながら結構なスピードで走る。

時には道を外れて路肩の土煙を上げることもある。サスペンションのしっかりしているランドクルーザータイプが適している。華奢な車では持たない。「なぜこんなに穴ボコが多いのか？」聞いてみた。運転手君曰く、「市中の道路は中国の援助で舗装してるが、土の上にアスファルトを敷くだけなのですぐに穴になる。郊外の日本の会社がやってくれた道路は 10 年経っても大丈夫だ。」と返事が返ってきた。

空港からウランバートル市街までは 45 分位の道のりだ。空港を出るとすぐに草原の中の道を走る。時々馬や山羊や牛の群れが見られる。放牧といっても囲いが有るわけではなく、放し飼いに近い。どうして自分の家畜と他人の家畜と区別するのだろうか？突然車が止まった。牛の群れが道路を横切っている。人は見あたらない。勝手に牛が移動しているのだ。ほとんどの牛が道路を渡りきっても私たちの車は動かない。なんと一頭の牛が道の中で用を足しているではないか。オシッコが湯気を立ててアスファルトの上を流れてゆく。日本で -20°C くらいではオシッコはたちどころに凍ると聞いていたがあれは嘘だ。やはり流れた。



発電所から暖房用蒸気を送るために直径 50 cm 位のパイプがウランバートル市街に伸びているのを見ながら市街地に入る。

2. 日本で地震発生と津波発生の知らせ

3 月 11 日に日本で発生した地震の情報は「モンゴルでは NHK が見れるので逐一被災の状況はこちらにも伝わっている。ニュース画面を見て、モンゴルの人たちはポカーンとして『映画を見ているようだ』と思った。」と言う。彼らはあまり地震を経験したことはないし、まして海を見たことがない人達だ。いくら私が説明しても、所詮彼らは頭の中であれこれ想像するだけ。ただ自動車は日頃からなじみ深いので、自動車や家屋が津波に流されるのを見て、その怖さの実感がわいたようだ。

丁度その頃日本では、私が指導している会社の社員が 6 名いた。彼らは 3 月 4 日～ 3 月 10 日まで仙台市近郊の工場で実習を受けていた。11 日は予定の実習が終了し帰国の日だった。

彼らは楽しい思い出を抱きながら工場で最後の昼食をとった後、仙台駅に向かうべく食堂を出た。まさにその時地震が起きた。後で聞くと、その時の彼らの驚きは筆舌に尽くせない。「なんだ！なんだ！」、「地面が動いた、立ってられない」、「もう俺死ぬ」と思ったと彼らは言う。幸い工場は山地にあり彼らは津波には遭わなかった。津波にあったらどんなに怖かった事だろう。地震のため楽しみにしていた新幹線や飛行機は使えず、社長が機転をきかせすぐに工場のワゴン車を出し、社長も同乗し一緒に宮城県、秋田から山形へ抜け、とりあえず東京にたどり着いた。その間ひっきりなしに余震が襲い、彼らは生きた心地がしなかったという。

モンゴル航空は直ちに成田からウランバートルに向かう特別機を飛ばした。それによりなんとかウランバートルにたどり着く事が出来た。彼らは本当に心から幸運を喜んだという。

モンゴルの人々は元々親日家が多いし、日本人を尊敬もしてくれている。例えば、2004年10月に発生した新潟県中越地震に対し発展途上国であるにもかかわらずモンゴル国の政府は毛布 520 枚を支援したほか、義援金 600 万円。1995 年の阪神淡路大震災の際にはモン



ゴル政府は毛布 2,000 枚、手袋 500 組をすぐに支援している。

2011 年の東日本大震災に対してもモンゴル政府の対応は早かった。12 日には、いち早く全公務員に給料 1 日分を救援物資とともに支援するよう呼びかけた。私の関係する企業では従業員から 1 日分の給料と会社から 3,000 万円の義援金を支援した。その他日本では悪役にされる元横綱の朝青龍（ドルゴルレン・ダグワドルジ）も自らはもちろん国中に義援金の支援をよびかけている。ウランバートル市内のデパートは翌日には義援金箱を入り口に設置、子供が貯金箱をもって来たり、数 10km を馬で義援金を届けに来た人もいる、その他多くの企業や民間人が救援を申し出ている。

日本国内では法務省が管轄する全国の刑事施設に収容されている受刑者など、およそ 2,800 人から、東日本大震災の被災者に対し、2,100 万円以上の義援金が送られた。などのニュースは彼らの思考の物差しでは計れず「オー」と両手を広げるしか答えられない。

日々、NHK で報じられる被災地の人々の態度に対しても、彼らは驚きをもって、「被災の日本人の人々の振る舞いはすばらしいと思うがとても我々にはできない」とつぶやいた。

被災した日本人の行動を見ていると、欧米人や自分たちの自己主張の行動が醜い事を実感する、ますます日本人が好きになった。」という声が多かった。

残念ながらこれらの事はどうゆうわけか日本で報じられたとは聞かない。

3. むすび

今回の災害は地震と津波さらに原子力発電の事故と三つの災難が重なった大きな災害とはいえ、当時の海外でのニュースは原発のことが多く発信され、しかもかなり誇張・偏っていた。その事が「安全な国日本」から「危険な国日本」へとイメージを変えつつあるのは残念なことである。SNSなどを通じ海外の人は発信された情報から日本のことを判断する。

従って、発信する側で注意しないと間違った情報を与えてしまう。近隣でも韓国や中国などは当時の日本は国家の非常事態状態にあると捉えていて、日本に対する極端な報道を国内にして、北海道から九州まで放射能汚染が広がっていると思いついでいる人もいるという。中には放射能に対する知識も希薄で風邪のように人に伝染すると思っている人さえもいる。

モンゴルで、現地のある人は次のように言った。「原発のような危険な装置に『想定外』という概念が有るのは理解できない。まして日本は地震が多い国であることは世界中の人が知っている。

津波という言葉が世界で通用するほど日本の災害の話は頻繁に話題になる。当然どのような事が起こっても問題が起こらないように設計すべきではないのか。それを不十分に想定して原発を作る意味が分からない、モンゴルには原発は無いけれど『今まで大きな事故は起こっていないから』という経験から想定された物はいない」という彼の言葉には返す言葉がない。

技術者としては耳が痛い話で、今後も私は可能な限り風評に流されることなく、技術者倫理を大切に勇気を持って技術指導をしたい。



モンゴルの早春 草原が緑になるのは6月
カシミヤ山羊の仔山羊





モンゴルでは馬は家族のように特別扱い。
まず男も女も乗馬ができないと生きてゆけない